

平成28年度 学校評価実施報告書

1 1回目評価

・個別評価項目の設定及び各項目にねらいを定めた取組の計画・実施 ・取組結果を検証するためのアンケート項目や各種指標の設定			
	評価項目	(前年度評価を踏まえた) 年度末までの取組	(取組結果を検証する) アンケート項目・ 各種指標
確かな学力・豊かな心・健やかな体	保育の改善・充実	非認知能力を高める保育をめざし、各学年・個人の発達に応じて、自己発揮できるように環境や援助を工夫する。	・日々の幼児の姿の変容やエピソード検討 ・アンケート『園生活で成長したと思うか』『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいますか』
	幼小接続の視点	学びに向かう力を育てる(非認知能力)	・事例検討 ・アンケート項目『自分の気持ちを伝えようとしているか』『好奇心をもって遊んでいるか』
	心と体・生活習慣	保育の様々な場面で、身体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるようにする。基本的な生活習慣を家庭と共に定着させる。	・一つの活動の中の育ちを多角的に捉える・日々の幼児の姿を見直す・アンケート項目『体を動かして遊ぶことを楽しんでいるか』『生活習慣が身についてきたか』
	信頼関係・折り合い・自己肯定感	ありのままの姿を受け入れ、一人一人の持ち味・力を十分に発揮する場面を作る。様々な感情体験を大切にする。必要な時には教師を毅然とした態度で子どもに接する。	・日々の幼児の姿を見直す。アンケート項目『教職員に話しかけやすい雰囲気はありますか』
園独自の項目	幼小連携の取組の推進	南浜小学校の子どものかかわり、教職員の学び合いを深める。	・交流や研修の回数 ・幼小連携の取組の結果を考察する
	預り保育の充実	預り保育の参加人数を増やす。預り保育ボランティア活用の充実。指導計画の作成・見直し	・参加人数の分析・保育記録の作成と活用アンケート 『預り保育は子育て支援として役に立っていますか』
	子育て支援の推進	教育相談(つばみ組)の参加者増加・質的向上をめざし、次年度入園者数を増加させる。	・教育相談の参加人数 ・参加者アンケート ・入園者数



・アンケート実施結果、 その他指標の結果について整理	自己評価	
	評価日	平成28年7月11日
	評価者・組織	教職員による職員会議
アンケート結果・ 各種指標結果	分析 (成果と課題)	分析を踏まえた改善策
・教職員が協力して様々な保育場面での非認知能力を捉えることができた。 『園生活で成長したと思うか』 そう思う100%『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいますか』99%5歳児100%	各学年とも援助や環境の工夫は各学年とも適切に行われている。さらに一人一人に応じた興味や伸びようとするところを的確に捉えられるようする必要が	2学期以降も、保育の中の小さなエピソードも大切に、さらに援助の在り方や環境構成の工夫を重ねていく。
3歳児の時から非認知能力が互いに絡まり合って育っていくことが分かった・自分の気持ちを伝えようとしているか97%5歳児100%『好奇心をもって遊んでいるか』99%5歳児100%	一つの事例を丁寧に見直すことで、多くの非認知能力の育ちをみつけることができた。伝える力・好奇心などの育ちもみられた。	さらにきめ細かに育ちを捉える。また育ちがとらえにくい子どもに対しての援助の工夫を行う。
生活習慣は園で、ステップを設けることで、定着しやすくなっている。『体を動かして遊ぶことを楽しんでいるか』100%『生活習慣が身についてきたか』92%	年長児への憧れや小学校の協力による校庭使用の増加などにより、思いきり体を動かす経験が多くなっている。運動量の差がある学年もある。	生活習慣は各学年ごとのレディネスの違いに注目して、必要な援助をする。
担任との信頼関係を深め、自分から遊びをみつける姿がみられる。また様々な場面で葛藤体験をしている。『教職員に話しかけやすい雰囲気はありますか』98%	担任はもとより、園全体で一人一人の子どもを育てるという姿勢を大切にできたことで、保護者の方も安心感を高められた。多くの場面で、自分の思いをまず表す・困ったときは先生と一緒にしたら大丈夫・という思いをもつことができた。	葛藤場面・協力する場面などで、子どもの思いを十分に表せるようにするとともに、必要な援助は積極的に行う。
交流や研修回数の増加(交流前後の教職員間の打ち合わせや振り返り、小学校の教職員の人権研修に参加)	交流に向けて、教員間で互いの願いや意図を伝え合い、細かい役割分担を決めることで有意義な交流となっている。顔や名前が分かる、手紙を交わすなど交流と交流の間に思いをつなぐことが大切である。	後期も運動会の校庭使用や交流の機会を通して、5歳児だけでなく、3・4歳児も小学校をより身近に感じられるようにしていく。
『預り保育は子育て支援として役に立っていますか』99% 5歳児100% 預り担当教員と園長を中心に指導計画の作成を行った。	園長を窓口として個別の理由に柔軟に対応し、子育て支援としてのサポートになっている。喜んで参加する子どもが増えている。	就労支援だけでなく、保護者のリフレッシュ、介護、妊娠出産、緊急時サポートなど様々な目的で利用できること、異年齢のかかわりで育つものなどを積極的に伝え、さらに活用してもらえるようにする。
参加人数は大幅に増えた。活動内容は、自由に遊ぶ時間を十分に確保すると同時に、保護者の方にとって“幼稚園で遊んだ”という満足感が得られるものとなるようにした。	地域の回覧や児童館でのチラシ配布等により、教育相談実施をアピールした。すべての教職員が保護者をサポートする姿勢で丁寧に対応できるよう心がけた。	在園児の歌や踊りを見てもらう機会は、未就園児の保護者に入園後の姿を知ってもらうことができる。また在園児にとっても、自信につながる活動となっている。



学校関係者評価	
評価日	平成28年7月28日
評価者 (いずれかに○)	○学校運営協議会 学校評議員
学校関係者による意見	学校運営協議会・ 学校評議員による 改善に向けた支援策
子どもたちがいつも生き生きと生活している姿がみられる。地域の中で見かけたときも地域の方々に親しみを	さらに保護者の方も巻き込んで、あいさつをしたり『子どもたちを、親だけでなく、地域で育てる』という意識を強めていく
遊びの中で育つものを大切にし、小学校でも教師にしろらいかんをもって接する姿がよく見ら	日常の遊び、地域行事や日常の地域とのかかわりの中で育ちを最大限にのびのびと人財や遊びの場が必要な時は、援助し
保護者の方が子どもに『どうかかわるのか』がとらえにくいことがあるのではないかと	保護者に具体的に、どのようにするのかを園からも積極的に伝えていってほしい
今、折り合う力がとても重要になってきている。幼稚園で十分思いが“ぶつかる”、自分の“思	様々な機会に、幼児期の葛藤体験の大切さを、伝えていく。
伝統的に地域の保幼小のつながりが密接である。その上でさらに『育ち合い』を活発にしていってほしい。	花傘バレーやその他の地域の行事への参加を通して、さらに地域への愛着、人とのつながりを感じてほしい。
必要な時に預けることができることは、保護者にとって助かる。	今の時期だからこそその親子のかかわりを大切に、安心して遊べる場としての預かり保育の充実を願う。
保護者のニーズを把握しながら、公立幼稚園の良さを大事にしてほしい。	地域の掲示板や口コミなどにより、公立幼稚園の良さをアピールし、参加・入園希望につながるよう

2

3

平成28年度 学校評価実施報告書

幼稚園名(伏見南浜幼稚園)

2回目評価

・個別評価項目の設定及び各項目にねらいを定めた取組の計画・実施 ・取組結果を検証するためのアンケート項目や各種指標の設定			
	評価項目	(1回目評価を踏まえた) 年度末までの取組	(取組結果を検証する) アンケート項目・ 各種指標
確かな学力・豊かな心・健やかな体	保育の改善・充実	・園内研や日々の保育後の話し合いを活発に行う。 ・課題に対しては具体的な手立てを考えて保育に臨む	・日々の幼児の姿の変容やエピソード検討 ・アンケート『園生活で成長したと思うか』『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいますか』
	幼小接続の視点	・リーディング研究発表に向けて、非認知能力の育ちや必要な援助環境の工夫について考察を深める。	・事例検討 ・アンケート項目『自分の気持ちを伝えようとしているか』『好奇心をもって遊んでいるか』『粘り強く取り組む姿がみられるか』
	心と体・生活習慣	・一人一人の子どもを見直し、運動をあまり好まない子どもも積極的に取り組める工夫をする。・生活習慣は各学年ごとのレディネスの違いに注目して、必要な援助をす	・一つ一つの活動の中の育ちを多角的に捉える・日々の幼児の姿を見直す・アンケート項目『体を動かして遊ぶことを楽しんでいるか』『生活習慣が身についてきたか』
	信頼関係・折り合い・自己肯定感	・葛藤場面・協力する場面などで、子どもの思いを十分に表せるようにするとともに、見守る援助・積極的にかかわる援助のどちらも大切にする。	・日々の幼児の姿を見直す。・アンケート項目『教職員に話しかけやすい雰囲気はありますか』
園独自の項目	幼小連携の取組の推進	幼小連携の取組を考案し、年間指導計画に位置付ける。隣園時の担任の話し、学級懇談会、家庭教育学級での校長講話、HPなどで幼小連携の様子や子どもの育ちなどを具体的に保護者に伝える。	・交流や研修の回数 ・幼小連携の取組を考察し子どもの育ちを明らかにする
	預かり保育の充実	担当教員との連携を図り、預かり保育での様子についても保護者に伝える。記録やアンケートをもとに指導計画の見直しを行う。	・参加人数の分析・保育記録の作成と活用アンケート『預かり保育は子育て支援として役に立っていますか』
	子育て支援の推進	幼稚園の良さをアピールし、入園者数増加につなげていく。	・教育相談の参加人数 ・参加者アンケート ・入園者数

⇒

・アンケート実施結果、 その他指標の結果について整理	自己評価	
	評価日	平成29年3月14日
	評価者・組織	教職員による職員会議
アンケート結果・ 各種指標結果	分析 (成果と課題)	分析を踏まえた改善策
『園生活で成長したと思うか』そう思う99%5歳児では100%『教職員や友達と一緒に過ごすことを楽しんでいますか』100%	一人一人の子どもの安心感と自信を高めることができた。	日々のエピソードをさらに焦点化した丁寧に分析する。本園園児の傾向として、さらに、自己発揮力や状況を捉える力を高める保育をめざす。
『自分の気持ちを伝えようとしているか』100%『好奇心をもって遊んでいるか』100%非認知能力がそれぞれの学年相応に身についている。	アンケート回答者(回答率95%)の全員が育ちを実感している。保護者と教職員がその育ちを共感する関係をさらに深める。	引き続き、非認知能力の育ちの姿を、細やかに捉え、必要な具体的な援助を明らかにする。
『体を動かして遊ぶことを楽しんでいるか』100%『生活習慣が身についてきたか』99%生活習慣は園と家庭が協力して身に付けることができた。	保育の中で、教職員が意識して様々な体の動きを取り入れ、“苦手意識”をもつことなく達成感を味わえる援助を行うことができた。生活習慣の定着率の増加。	一人一人の子どもの保育の中での経験を捉え、引き続き、様々な運動遊びの環境を整える。生活習慣は一人一人に適したかわりや手立ての工夫を続ける。
『教職員に話しかけやすい雰囲気はありますか』98%保護者と担任との信頼関係を深めることで、子どもが安心感をもって、友達とのかかわりを広げる姿がみられる。	日常的に、担任が中心となり、保護者と子どもの育ちや課題を共有できるように努めてきた。葛藤場面を大切な育ちの機会と捉え、子どもの思いを丁寧に捉えるよう努めた。	教職員全体がさらに余裕をもち受容的態度で保護者との思いの共有を深める。
交流や研修回数は当初計画よりも増加した。リーディングスクールとしての研究も推進できた。	幼小の教職員同士の相互理解がさらに進んだ。保護者も幼小連携の意義を理解し、進学に対しての安心感を高めている。	小学校が新たな組織体制になった場合でも、引き続き、相互理解を深める連携を進められるようにする。
『預かり保育は子育て支援として役に立っていますか』99%4・5歳児ほぼ全員が利用している。指導計画の見直しを行い、預かり保育の活動内容を充実に努めた。	短時間の就労をする母親の数が増えた。活動内容を、子どもの実態に応じて変化させた。	引き続き、保護者のニーズに応じた柔軟な対応を行う。利用者数の増加に伴い、学生ボランティアの活用もさらに積極的にすすめる。
登録者数は増加した。参加者からは、園の保育内容を熟知してから入園することができたという声が聞かれた。入園者は昨年度より増加した。	園の教育内容を知らせる機会となり、入園者は園の教育方針に納得して、入園を決定している。	今後さらに、在園児が未就園児クラスと交流する機会を増やす・保育内容を端的に伝えるパワーポイントなどを用いた定期的な『園紹介』の企画を早い時期から行う。

⇒

学校関係者評価	
評価日	平成29年3月17日
評価者 (いずれかに○)	○学校運営協議会 学校評議員
学校関係者による意見	学校運営協議会・ 学校評議員による 改善に向けた支援策
様々な園や地域行事ののびととした姿がみられる。	さらに保護者の方も巻き込んで、あいさつをしたり『子どもたちを、親だけでなく、地域で育てる』という意識を強めていく
学年が上がるにつれて、落ち着きや連帯感が見られる。	人材や遊びの場が必要な時は、援助したい。
南浜地域においても、小学生が(デジタル)ゲームをする姿が以前より見られる。幼小時に思いきり体を動かし、原体験をしてほしい。	様々な地域団体との交流活動に於いて、遊びの幅を広げる。
教職員に受容の姿勢が見られる。さらに子どもたちが善悪の判断ができるように、幼児期に、今だからできる『葛藤』を体験してほしい。	様々な地域行事の中で、積極的に声を掛けたり、日常的に必要なアドバイスをを行う。
南浜地域の伝統(保幼小中連携)を基に、さらに強固な連携のモデルを示してほしい。	田んぼ遊びや地域の自然素材などの地域の資源を幼稚園でも活用してほしい。
預かり保育の取組をさらに地域に周知する必要がある。	地域の会合や“ロコミ”などで取組を知らせる。
公立幼稚園ならではの取組や雰囲気は今後とも大切にしていってほしい。新たなアピールの方法を探してほしい。協力も行う。	地域の地生連のネットワークも活用し、子育て支援の情報をさらに広く発信する。

総括・次年度の課題

子どもたちは、安心感をもって園生活を送り、夢中になって遊ぶ姿がみられる。保護者や地域からの信頼感は、安定して得られていると実感するが、この結果に安住することなく、常に担任を始め全教職員が子どもの実態を的確に捉え、その中での育ちを保護者と共有し、次の具体的な手立てを探っていく営みを緊張感をもって続けていく。地域に『就労支援の預かり保育を実施していること』『遊びの中でこそ、本物の育ちがあること』をさらに広く、的確に伝えられるようにする。引き続き地域の保幼小中連携を深め、子どもも教職員も“心の通い合う”関係をつくる。さらに可能であれば、地域の小規模保育施設との連携を進める。